

真の女性解放とは何か——平塚らいてうの人間観・女性観

水谷香奈

はじめに

平塚らいてう(本名・明^{はる}、1886-1971)は明治末から昭和にかけて、文芸評論、女性解放運動、平和活動など多様な方面で活躍した人物である。中でも彼女の事績で最も有名なものの一つが、明治44(1911)年の雑誌『青鞥』の発刊であろう。発刊の辞である「元始、女性^{はる}は太陽であった」(以下「元始」と略す)は女性解放のシンボリック宣言文として知られ、以後らいてうは主に文筆活動を通して女性の権利と尊厳を世に訴え続けた。家や夫に対する女性の従属を容認した旧民法に従うことを嫌ったらいてうは、やがて画家を志していた青年・奥村博史との事実婚に踏み切るが、これは当時の良家の子女としてはほぼあり得ない選択だったと言えよう。

一方、らいてうは家庭においては夫の不安定な収入を自身の原稿料で補うなど、家庭と仕事を両立させるべく努力を重ねている。そして、出産や子育てを期に、母性の重要性を感じるようになっていく。与謝野晶子(1878-1942)らとの母性保護論争や、市川房枝(1893-1981)らと立ち上げた新婦人協会は、女性の政治的・社会的権利の確立を求める活動の一部だが、それらの根底には彼女自身が実生活の中で感じてきた女性として、母としての体験があったと思われる。それはらいてうにとってはおそらく精神の深いところに根ざしたものであり、戦後は平和問題に対して女性の立場から積極的に発言しているが、その際にも彼女の思想を支える基盤となっている。

本発表は、そのようならいてうの活動の根源に位置する思想について、まずは彼女が仏教から受けた影響について概観し、続けてらいてうが若い頃に得た禅の見性体験と結婚後に主張するようになる母性主義との関係を論じたものである。

1. 平塚らいてうの生涯と仏教

らいてうは女学校を卒業すると、女性に学問は不要という父の意向に逆らい、母のとりなしもあって明治36(1903)年に17歳で日本女子大学校(現日本女子大学)に進学した。家政科に入ったが、らいてうの心を捉えたのは哲学思想であり、入学後最初の年は、学長の成瀬仁蔵(1858-1919)が講義した「実践

倫理」の授業を熱心に聴講したという。学生への影響を考慮し、次第に形而上学よりも実用的・実利的な学問を重んじる実証主義を強調するようになっていく成瀬に対して、らいてうの情熱は冷めていったが、彼女の自己探求が止むことはなかった。らいてう自身、自分が若かりし頃の心境について、次のように回顧している。

わたくしの若いころ——といってそれは明治の末期であります、女子大卒業前後のわたくしたちにとって、結婚や職業の問題にさきだって、もっと重大な、のっぴきならぬ根本の問題は、「我とは何か」「宇宙とは何か」「神とは何か」ということでありました。つまり、世界観、人生観に関することでありました。このためにわたくしなどは、いのちをかけて取っ組んでおりました。この問題がはっきりわからなければ、自分のほんとうの生き方、在り方がわかりません。何をにおいても生きるためにまず解決しなければならぬことなのでした¹。

らいてうはこのような哲学的問いへの答えを探るべく、スピノザ、エックハルト、ドイツ観念論、ヘーゲルなどの思想に触れ、キリスト教にも関心を持っていた。彼女と禅との出会いは、間接的ではあるがキリスト教を介したものであった。明治38(1905)年春、らいてうはキリスト者である網島梁川(1873-1907)が自身の内に神を見出すという神秘的体験を告白した「予が見神の実験」という告白文を読んで衝撃を受け、自分もまた単なる観念ではない神、自己に内在する神を体験してみたいと思った。そのような折、大学の寮にいた同級生木村政子の部屋で今北洪川(1816-1892)の『禅海一瀾』を目にしたらいてうは、見性は網代の見神と同じ体験に相違ないと思い、大学卒業を挟んで約1年間、日暮里にある両忘庵という禅の道場で、木村とともに日々坐禅に励むことになる。

そもそも、見性とは自己の本質・真の自己が仏陀と同じであるということ(即ち「仏性」)を、言葉や理屈などを抜きにして直観的に理解することである。禅宗において特に重んじられる宗教体験であり、彼女の同級生である井上咲子は、中原鄧州(南天棒、1839-1925)の元に参禅してわずか1週間で見性したという。しかし、らいてうは「父母未生以前の自己本来の面目」という公案を与えられたものの、なかなか見性できないまま大学を卒業することになった。その後

¹ 平塚らいてう著作集編集委員会編『平塚らいてう著作集』第7巻(大月書店、1984年)、71頁。

も多忙な日々を送りながら、熱心に両忘庵に通った結果、20歳になった夏、釈宗活老師の『臨濟録』提唱を聞いたときに、ついに次のように見性体験をすることができたという。

「赤肉団上有無位真人常面門出入看よ看よ。」(無位の真人——本来の面目——が赤肉団上より常に出入す、看よ看よ)という老師の充実した声が、頭のてっぺんから軀の中をずっと電流のように通り抜けた感じとともに、その瞬間「わかった!」と思ったものです²。

すでに多数の先行研究で指摘されているとおり、らいてうの見性体験は、彼女の文学作品や女性解放運動に生かされている。たとえば、「元始」は「元始、女性は実に太陽であった。真正の人であった。今、女性は月である。他に依って生き、他の光によって輝く、病人のような蒼白い顔の月である」という有名な一文で始まっている。これは社会の中で抑圧され、自分らしい本来の生き方ができなくなっている女性の姿を、太陽の光を反射することでしか輝けない月にたとえたものだが、ここで登場する「真正の人」は、「元始」の他の箇所では「天才」とも言い換えられており、それには男女の区別はないという。つまり、この「真正の人」「天才」とは仏教的に言えば仏性を指していると見てよいであろう。

らいてうはまた、「元始」において女性たちに「私どもは我が内なる潜める天才のために我を犠牲にせねばならぬ。いわゆる無我にならねばならぬ」とも呼び掛けている。これも、人間として真に自由な生き方をする(即ち「天才」に立ち戻る)ためには、社会の中で形成されてきた自己の殻を破る(「我を犠牲にする」)必要があることを説くものであり、これが「無我」という意味であろう。

上記から読み解けるように、らいてうの求める女性解放とは、まず人間の本質(=仏性)を自覚することに基づいているという点が重要である。なぜならば、彼女のこの姿勢は実は青年期のみならず、生涯を通して一貫しているからである。たとえば昭和22(1947)年、らいてうは雑誌『令女界』への寄稿文「あなた自身を知れ」において、次世代の女性たちにこう呼び掛けている。

若き友よ、あなたご自身はじつは限りないいのちであり、神様であるということをはっきり知ってください。(略)わたくしは、あなたよりももっと若かつ

² 平塚らいてう『元始、女性は太陽であった——平塚らいてう自伝・上巻』(大月書店、1971年)、186頁。

た学生時代に、信仰問題で苦しみ悩んだあげく、座禅を久しくやりましたが、禅家では「父母未生以前の自己本来の面目」ということを申します。これはやはり生き通しのいのちである自分自身を言ったもので、本来神であり、仏である人間の本性の自覚です³。

ここから、神とも言うべき「限りないいのち」「生き通しのいのちである自分自身」とは、彼女が見性体験を通して得た真の自己、真我と同一であるというが認識していることがわかる。

らいてうはさらに、このような真の自己の存在は、仏教、キリスト教、神道などの各宗教に共通するとも述べる。彼女は1930年代には大本や生長の家など、複数の新宗教の教えに興味を示しており、それらの影響も多分に受けている可能性が考えられよう。出口王仁三郎(1871-1948)が執筆した、大本の教典『靈界物語』は、日本神話だけではなくキリスト教、儒教、仏教など世界中の様々な宗教・思想を取り込んでいる。その大本から後に独立して生長の家を設立した谷口雅春(1893-1985)は、すべての宗教は一つの神(真理)から分かれたものであり、それぞれの教えは違っても、その神髄は一つに帰結するという「万教帰一」を説いた。らいてうはこの谷口の主張に賛同しており、その思いが戦後も揺らいでいないことが読み取れる。

2. 見性と母性主義との関係

次に、見性体験に基づく「人間としての目ざめ」と、その先にらいてうが見出した母性主義に基づく「女性としての目ざめ」の関係について検討する。らいてうは「元始」において、男性と女性の根源的平等を主張しつつ、「私はむやみに男性を羨み、男性に真似て、彼らの歩んだ同じ道を少しく遅れて歩もうとする女性を見るに忍びない」とも述べている。つまり、単に男性と同等の生き方、同等の権利獲得を求めているのではなく、男性とは異なる「女性としての目ざめ」を求めていたことが伺えるのであり、この点について末木文美士氏の以下の分析は実に的を射ている。

らいてうの発想には二重性がある。第一に、男性であろうが女性であろうが、性の区別を超えて、「真正の人」に目ざめなければならない。第二に、

³ 前掲『平塚らいてう著作集』第7巻、20-21頁。

それは「個」が目ざめるだけでなく、「性」としての「女性」が目ざめなければならないという発想が重なる⁴。

しかし、禅をはじめとする仏教は「女性としての目ざめ」に十分言及しておらず、らいてうの要求を満たすことはできなかった。らいてうにとって、その答えはスウェーデンの思想家・女性運動家であるエレン・ケイ(1849-1926)の恋愛論や母性主義であった。ケイは、ストックホルム大学で教鞭を執るという知識人であり、『児童の世紀』(1900年)で、児童教育について提言したことで知られている。当時のスウェーデンでは、女性が社会参加を進める中で男性と競い合い、その中で夫婦間の不和や育児問題などさまざまな問題が生じていた。ケイ自身は結婚しなかったが、この現状を鑑みて、『恋愛と結婚』において女性の完成は母性を通して行われるのであり、女性の自由は単なる物質的条件によるのではなく、男女の深く自由な精神的交流の中にあると主張した。

恋愛の選択とは、男性はただ一人の女性を、女性はただ一人の男性を見つけ、これを獲得し、維持することなのだ。(略)それは、彼ら自身の個人的人格の最高の向上であり、彼らが人類として生きる最高の生活形式であり、彼らの永遠なる生命の最高の悟りである⁵。

これは単なる自由恋愛のことではなく、男女が互いを常に精神的・肉体的に尊重し合う関係であり、慣習、欲望、経済的安定などに基づく恋愛や婚姻関係は不完全なものとされる。らいてうはこれを実践すべく、この頃に芸術家の奥村博史との事実婚に踏み切った。当時の民法の規定では、結婚と同時に夫への従属が確定するため、彼女はあえて籍を入れなかったのである。

だが、現実には愛情関係を夫婦間で保つには双方の絶え間ない努力が必要であり、さらに子どもが生まれたことで、らいてうは仕事と家庭との両立がいかにも困難であるかを、身をもって感じる事となる。彼女が『青鞥』の責任者を辞する理由も一つはそこにあり、奥村に十分な収入がない中、らいてうは家事をしつつ原稿を書いては、原稿料を生活費に充てるという生活を何年も続けることとなった。

しかし、「子どもを持たなかったころは、まったく母性というものにめざめず、

⁴ 末木文美士「女性の目覚めと禅：平塚らいてう」(『福神』第11号、2006年)、161頁。

⁵ エレン・ケイ『恋愛と結婚』(小野寺信・小野寺百合子訳、新評論、1997年)、177頁。

この世の中の多くの母と呼ばれる女たちが、また母性愛というものが、尊いもの、ありがたいものなどと思われるどころか、むしろ愚かしいものの一つときえ思われ、自分が子供など産んで、そうした母になろうなどとは考えてみたことがなかったばかりか、自分の個性を自由に伸ばし、自分の仕事に思う存分、生き抜こうと願うわたくしにとっては、これは、同時に何よりもおそろしく、最後まで忌避していた一人であった⁶」というらいうも、家族との生活を通して次第に他者を愛おしむという感覚に目覚めていった。そして、娘が拾ってきてかわいがっていた子猫が死んだときに、次のような感覚を持つに到る。

わたしはあまり普通という意味で母性型の女性ではない。自分にもそう思えるが、他からもそう見えるらしい。だのにこのわたしがいつさいの母性愛の前にたちまち不覚の涙を流すとはどうしたことだろう。しかしこの涙こそわたしの生活の最深所である無意識の奥底からおのずから流れ出る最も純な、偽りを交えない、何ものかに違いない。幾千万年の長い動物生活時代を過ぎ、さらに人類生活の長い世紀を通じて、いつさいの「女性」とよぶ性の無意識の深みに存在する、またこれがあるために今日まで生命が継続し、擁護され、そして無限に発展してきた母性の本能が、この一個の人間の女性であるわたしにも、同じく厳然として存在し、それがこの世におけるいつさいの母性本能の赤裸々な発現に触れ、電光石火的に共鳴共感と呼起こす、それがこの涙なのではあるまいか。

あるいはまたひょっとしたら、わたしの中に存在する母性本能は、実は、わたしが現に意識しているよりはもっともっと強い、大きなものなのかもしれない。わたしのたった二人の子供だけでなく、世界中の子供を、否、生きとし生けるもののすべてを愛し、いつくしみたく願っているのかもしれない。それだのにわたしが受けてきた過去の教養、男性中心の社会的影響、現在の生活環境などによるわたしのこの意識は、この打算的な理知生活はわたし自身の知らぬ間に思わぬ抑圧をわたしの母性のうえに加えているのかもしれない⁷。

ここで言う「母性」とは、らいてう自身はそうように呼んでいないが、「生きとし生けるもののすべてを愛し、いつくしみたく願う」とあることから、仏教的に表

⁶ 前掲『平塚らいてう著作集』第6巻、212頁。

⁷ 前掲『平塚らいてう著作集』第5巻、224-225頁（下線は筆者による）。

現すると「慈悲の心」と言えるように思う。慈悲にも男女の別はないが、ここでは「母性」と表現されることで、女性的な側面が強調されていると見ることもできる。つまりこの「母性」とは、特定の子供をもつ母親の心情ではなく、あらゆる生命を我が子のようにいとおしむ気持ちを指している。らいてうが「今日の母性愛は、自分が生んだから、また育てたから愛するというような、そんな狭い、本能だけのものから進んで、理性の加わった、社会的なものになりつつあります⁸」と語るのもその意味からであり、母性によってすべての生命を慈しむという観点から、彼女は平和運動を展開するのである。

以上のように、らいてうの思想の中心は、禅によって得た「真の自己」「天才」への確信から、母性へと転換していく。先行研究で指摘されているとおり、母性保護論争に関連するらいてうの著作には、仏教的な表現がほとんど見あたらず、一見してらいてうの思想は仏教から離れたかのようにも見える。しかし、らいてうの中で、見性体験によって自覚した真我が、ケイの唱えた母性にとって替わられたとするならば、戦後においてもなお若い女性に禅と同様の自己探求を勧めるらいてうの心境を、どのように説明すれば良いのだろうか。

管見の限り、らいてうはこの問題に明確に答えてはいないが、1948年に「わたくしの夢は実現したか」とのエッセイで、戦後制度的には男女平等を（完全ではないにせよ）獲得した女性たちに向けて、らいてうが次のようなことを語っているのは注目すべきだろう。

そこでわたくしは、制度において解放された日本の女性のすべてが、いまもう一度、日本の婦人運動の最初にたちかえり、その出発であった人間としての自分の本性を、その尊厳を、さらにもっとはっきりと自覚することの必要をせつに感じるものである。もともと自分は人形でも、ロボットでも、また女性動物でもないのだ。無限の生命を、無限の能力を内在する尊厳なる神性、それがほんものの自分なのである。この真理を、わたくしたち女性のひとりびとりが、自我の探求ということをとおして知らなければならぬのだ。自我神性の探求、これはなにか大変むずかしいことのようにおもわれるかもしれないけれど、案外そうではない。なぜなら、もともとそうでありながら、ただそれを自分が知らずにいたのを、あらためて知るだけのことなのだから。たといいいまどいんなに弱く愚かしくみえる自分でも、自分

⁸ 前掲『平塚らいてう著作集』第6巻、100頁。

の心の内部を、正直に掘り下げてゆきさえすれば、その人はかならずその最深所において、神を(宇宙の本源である神とつらなる神性の実在を)掘りあてるに相違ないのだから。そして、この掘りあてるということは、すなわち自覚することなのである⁹。

ここでは、心の「最深所」において自我と出会えば、その自我とは「無限の生命を、無限の能力を内在する尊厳なる神性」であることに気づくということが述べられている。これは彼女が 20 代の時に取り組んだ禅定体験を下敷きにしていてと考えて良いだろう。そして、これを先の「この涙こそわたしの生活の最深所である無意識の奥底からおのずから流れ出る最も純な、偽りを交えない、何ものかに違いない」という母性愛に関する文章と合わせたとき、無意識の奥底に存在する「真の自我」とは、女性にとっては「母性」として認識されるものであるとらいてうは考えているのではないか、という仮説が立てられる。この仮説に基づけば、らいてうが主張した母性、つまり我が子に対象を限定した母親の感情ではなく、社会的な側面を持ち、拡大すれば仏教の慈悲にも共通するような、女性のもつ根源的性質としての母性は、彼女が若かりし頃に禅定によって体得した仏性と矛盾しない。むしろ、母性とは真の自我(仏性)に目覚めた女性が万物を我が子のように愛おしむときに心の奥底から発揮されるものであり、いわば女性における仏性の実践的側面として位置づけられていると見るのであり得るのである。

らいてうは、新たな日本社会を担う若い女性たちが真剣に自己を探究し、自身の精神的根底に男女平等の仏性、さらには慈悲の女性的実践とも言うべき母性が眠っていることに気づくことを願っていた。しかし、戦後において政治的・社会的な男女平等の実現は進められたものの、らいてうが期待する精神的な女性解放は顧みられることがなかった。らいてうはこのような女性たちの現状について、「このごろの婦人の傾向について——婦人解放と婦人の自我の解放」(1949年)の中で、女性が科学的、理論的要素を多く加えてきたのは大きな進歩であるとしつつ、次のように懸念を示している。

今まで婦人の長所とし、特徴ともされていたものを失ったのでは困ります。部分にとらわれることなく、全体を、ものの本質を感じとる叡智・直観・勤な

⁹ 前掲『平塚らいてう著作集』第 7 巻、42-43 頁(下線は筆者による)。

どといわれるはたらき、絶対、無限の世界への帰依の本能、すべてのものをうるおし、やわらげ、溶す、静かな心、深いひたむきな情熱、こういうような高貴な、人間の感性的なはたらきが女人の心から、今後、消えてゆくなら、それはまたあまりにさびしく、あまりに大きすぎる損失であります¹⁰。

このような、女性的な特質(女性性)の重要性はエレン・ケイも主張しており、らいてうの文章もケイの思想的流れを汲むものと見てよいと思われる。らいてうは老子の「他を知るものは知、自を知るものは明」との言葉を引いて、「わたくしたち婦人がもっていた生命の世界をひらく鍵をなくさないようにしましょう¹¹」と結んでいるが、これを女性が生命を誕生させる力を持つ(すなわち母になる)存在であることを示すととらえれば、母性を意図しているとも解釈できる。

まとめ

らいてうは女性解放運動の旗手の一人として知られるが、彼女が求めている真の女性解放とは何かについては、あまり知られていなかったのではないだろうか。らいてう自身、「青鞥運動は、今日、ある程度実現されているような婦人解放のための運動ではなかったのです。それはむしろ婦人の自我解放運動として出発したものなのです。(略)ここから出発して社会的に進出することは考えられていましたけれど、ところが戦後解放された婦人たちの傾向は、これとは正反対の方向のものであります¹²」と述べている。社会的権利を獲得することだけが女性解放運動ではなく、本来はその根底として自我の解放を行う必要があったのだが、戦後の女性たちが歩む方向は、彼女の思いとは逆だったというのである。

らいてうの主張は、現代の私たち女性から見たとき、一見すると前近代に逆行しているかのようにも見えるかもしれない。実際、女性が長い年月を経て獲得してきた社会的権利の重要性については、当然ながら否定されるべきものではないだろう。ただし、らいてうの母性主義はケイの理論の受け売りではなく、らいてう自身の家庭生活という実体験に裏打ちされたものであり、なおかつ、仏性の女性的発露という、一種の普遍性をもって認識されるものでもあった。らいてうはその確信に基づき、女性であっても「何のために生き、何のために結

¹⁰ 前掲『平塚らいてう著作集』第7巻、72-73頁。

¹¹ 同上、73頁。

¹² 同上、73-74頁。

婚するのか」を一人ひとりが自分に問い、答えを出していくことが真の幸福につながると指摘したのであり、現代に生きる我々にとっても、この問いは決してないがしろにすべきではない重さを持っているように思う。

付記 本発表内容は、すでに刊行された論文「平塚らいてうの思想——見性と母性に関する一考察」(『東洋大学井上円了研究助成・大型研究特別支援助成 日本文化の背景となる仏教文化の研究(平成29～30年度)研究報告書』、東洋大学東洋学研究所、2019.3、49-70頁)を一部要約したものである。